

ふるさと岡山を愛した坪田譲治と永瀬清子

ふるさとというものは、場所ばかりではありません。時代がかならずそれを制限しております。いつ頃のことかということなのです。つまり、なつかしい故郷も時代の中、歴史のなかにあるということなのです。今、ふるさと岡山を描こうとしておりますものも、今のうちにまとめておかないと、失われてしまうものがあると思うからであります。そういう記録として、愛読を賜りどう存じます。

(坪田譲治「編者のことば」坪田譲治編『少年少女文学風土記(2)ふるさとを訪ねて 岡山』泰光堂、一九五九年二月、内容見本より)



坪田譲治

1890(明治23)年-1982(昭和57)年
提供 坪田真紀



永瀬清子あて坪田理基男書簡

坪田譲治の三男・坪田理基男は、坪田譲治文学賞を通じて永瀬清子と出会い永瀬清子の詩集『あけがたにくる人よ』(思潮社 1987年6月)の地球賞受賞を祝した。

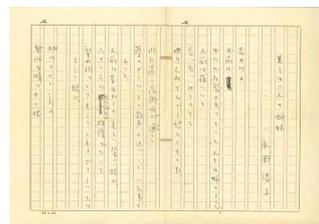
坪田譲治と永瀬清子は、岡山県生まれで岡山を描いた数々の作品を残しました。岡山の三大河川を愛した二人の人と作品を紹介します。



永瀬清子

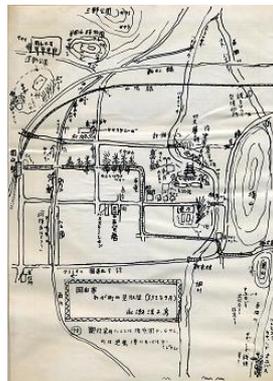
1906(明治39)年-1995(平成7)年
岡山市の自宅前にて

永瀬清子は、岡山市文学賞の一部門である坪田譲治文学賞運営委員を務め、坪田譲治の功績を伝えたいと願っていた。



原稿「美しい三人の姉妹」

永瀬清子の詩「美しい三人の姉妹」は、坪田譲治編『少年少女文学風土記(2)ふるさとを訪ねて 岡山』に収録された。



岡山市わが町の見取図

時代と共に文学研究の道も次第に広く深くなるが、求める人の力量がました時に、資料がなくなっていたらおおよそ情ない。今出来るだけ集めておけば必ずのちの人に喜ばれると思いい、近代文学館の夢を一步でも発足させたいと思いつづけている。

(永瀬清子「岡山近代文学館をつくりたい」——井手詞六のことから『おかやま同郷』第十卷第九号、一九七六年九月)

ふるさと岡山の魅力を伝える作品を残した